市立札幌病院精神医療センターの開設に期待する

平成24年４月１日、札幌圏の精神医療に対する新たな時代の要請に応えるべく、「市立札幌病院精神医療センター」がオープンした。その開設を長年にわたって要望してきた医師会関係者にとっても、誠に同慶の至りである。

平成23年７月６日に開催された社会保障審議会医療部会において、精神疾患を医療計画に記載すべき疾患に追加することで合意が得られ、地域医療の必須項目が「５疾病５事業」となったことは周知の通りである。それを受けて、厚生労働省は省令を改正し、各都道府県と政令都市は平成25年度以降の医療計画の策定にあたって、その骨子を反映させることが求められることとなった。

平成20年の患者調査によると、精神疾患の患者数が323万人と、現行４疾病で最も多い糖尿病の237万人をも上回っている。特に近年は、職場におけるうつ病、高齢化による認知症の増加など、精神疾患は国民に広くかかわる疾患となっていると言っても過言ではない。また精神疾患による死亡は1.1万人で、さらに年間３万人に上る自殺者の９割が、何らかの精神疾患に罹っていた可能性もあり緊急性は高い。

今後の医療計画における医療提供の視点では、地域の精神科病院・診療所・訪問看護ステーションなどが、個々に機能に応じた連携を推進することが求められる。なかでも身体合併症医療や救命救急医療の機能を完備した総合病院の存在は重要である。その意味で、このたびの「市立札幌病院精神医療センター」の開設は誠に時宜を得たものである。今後、隣接する救命救急センターや身体疾患診療科との連携のもとに、札幌圏の精神医療の拠点として大きく貢献することを期待したい。

（T.K）

春

例年にない豪雪に見舞われたこの地域も、やっと春の訪れを感じるようになった。新入学生が新しいランドセルで通学し、新社会人も緊張の表情で通勤する姿はいつ見ても清々しいものである。昨年は東日本大震災の影響もあってか「春」を感じることがなかったように思う。

当院も44名の新入職員を迎え、新しい「春の風」を感じる今日この頃である。毎年新入職員に必ず話しているのが、「何故なんだろう？どうして？」と思ったことは素直に口に出して先輩に聞きなさいということである。これは新入りの特権である。今はあまりにも個々で考えすぎて、先輩を頼るということが減ったように思う。私が医師になった頃は、新人看護師は毎日泣いていたように思う。それは先輩が厳しかったのかもしれないが、何となく新人を視野に入れて見守って面倒を見ていたことの表れであったと思う。結果、医療ミスを未然に防ぐことにつながり、連携を形づくる素にもなっていたと思う。“考えること”は大事であるが、わからないことはいくら考えてもわからない。時間をムダにしないで“聞くこと”である。また、これによって深い絆が生まれるものと考える。患者から親しみやすく頼られる病院職員になれるよう頑張って欲しいと思う。働くこと、学ぶことを多いに楽しんでいけるよう私達もより一層サポートして行きたい。

わが家の毎年春の恒例行事は、母を連れてのお花見だ。母は今年95歳、足腰が悪く、手を貸してやっと歩けるくらいであり、車中からの花見となるのだが、毎年口癖のように「きれいだね。桜を見られるのも今年が最後かね」と言いつつ、既に５、６年が経った。今年も桜の時期を家族みんな元気に迎えられることを本当に嬉しく思う。

（梅吉）